

灰色低地土での普通期水稻「ヒノヒカリ」におけるカリウム収支の実態

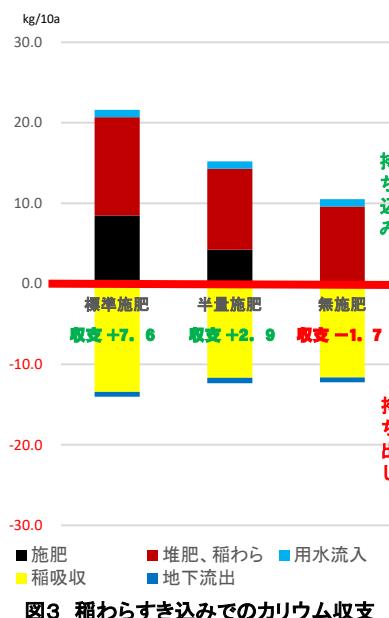
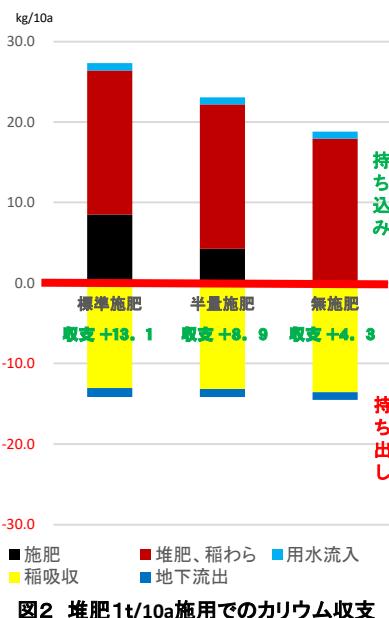
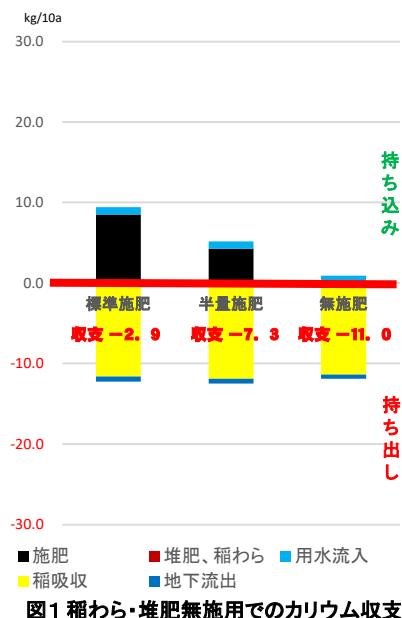
水田におけるカリウムの収支と適正施用指針の策定

背景・目的

- 水稻の肥料コストを削減するためには、窒素だけでなくカリウムの適正な施肥管理が重要ですが、カリウム施肥は、生育、収量に影響が出にくいため重要視されてきました。
- そこで、県内の主要品種「ヒノヒカリ」の灰色低地土における適正なカリウム施肥量を、カリウム収支の視点から検討しました。

成果の内容

- 稻わらをほ場にすき込みず、堆肥も施用しない場合は、カリウム標準施肥量（8.5kg/10a）でもほ場に持ち込まれたカリウムからほ場外に持ち出されたカリウムを差し引いた収支はマイナスとなりますので、カリウム肥料の減肥はできません（図1）。
- 牛ふん堆肥を1t/10a施用すると、カリウム肥料を施用しなくても、収支はプラスとなりますので、カリウム肥料は不要です（図2）。
- 稻わらを水田にすき込むと、カリウム半量施肥までは収支はプラスですが、無施肥ではマイナスとなりますので、カリウム肥料は半量に減らすことができます（図3）。



成果の活用方法(又は期待される効果)

- 堆肥施用水田及び稻わらすき込み水田ではカリウム肥料を減らすことが可能となり、肥料のコストを削減できます。

留意点

- 品種、土壤等により水稻のカリウム収支は異なりますので、定期的に土壤診断を実施してください。特にWCS等はかなりカリウムの持ち出しが多いので、堆肥の施用やカリウム肥料の増肥が必要です。